

北村透谷

原像と水脈



小沢勝美著

勁草書房

著者略紹

1933年 東京に生まる
1959年 東京学芸大学国語科卒業
現 在 法政大学助教授
現住所 八王子市上巻分方町353-60

北村透谷

1982年 5 月15日 第 1 版第 1 刷発行

◎著 者 お ぎわ かつ み
小 沢 勝 美

発行者 井 村 寿 二

発 行 所 株式会社 勁 草 書 房

東京都文京区後楽 2-23-15

電 話 (03) 814-6 8 6 1

振 替 東 京 5-1 7 5 2 5 3

*落丁本・乱丁本はお取替えいたします。 港北出版印刷・和田製本

*定価はカバーに表示してあります。

*無断で本書の一部又は全部の複写・複製を禁じます。

0095-859604-1836

三 桶谷氏の下降的把握の徹底性 四 挫折体験と暗い透谷像

五色川氏の歴史的認識を軸とする方法 六 透谷の文体の構造

七 透谷文学の根源的な可能性

あとがき

目 次

I

透谷における自由の発見とことば……………2

はじめに 一「恋愛」 二「故郷」および「粹」と「俠」 三「風流」

四「自然」 五 詩人的素質と思想家的素質の結合

透谷の原像 ―「富士山遊びの記憶」(1)……………23

一 研究の歴史 二 画期的な研究 三 明治十八年夏の透谷の志向意識

四 富士登山の時期と民権運動離脱の時期 五 政治小説家意識と小説(美術)家意識

事実と虚構 ―「富士山遊びの記憶」(2)……………40

一 抹消部分全体についての考察 二 表現における時間の重層

三十七年登山説の確定 四 記録と虚構の間 五 執筆は離脱以前か以後か

II

「故郷」の意味 ―「我牢獄」から「三日幻境」へ……………82

一「我牢獄」の地上指向性 二 魯迅の「故郷」と透谷の「故郷」

三 透谷の心機一転 四「三日幻境」の意味 五「希望」の故郷・秋山国三郎の発見

透谷と秋山国三郎……………96

一「安久多草紙」 二 青年時代の国三郎 三 戸吹の天然理心流

四 反権力志向 五 勤王佐幕以外の戦中派 六 自由民権運動と国三郎

七 国三郎と大矢正夫 八 太白堂の俳諧 九 「透逸の吟咏」

十 自由の精神 十一 国三郎の周辺

付録一 秋山国三郎年譜

付録二 私山家系譜

秋山国三郎像について —その江戸放浪体験の意味を中心に—

一 秋山国三郎像の今日的意味 二 否定の否定としての川口村

三 現実を射抜く眼と夢見る眼 四 第四のタイプとしての国三郎

付録一 聞き書き「秋山国三郎」秋山竜蔵

付録二 聞き書き「秋山国三郎の子孫たち」宮崎きく代

III

北村美那の一生 —透谷との出会いと苦闘—

はじめに 一 三多摩政界の重鎮石坂昌孝の長女として

二 日尾女塾と横浜共立女学校 三 儒教的志操とキリスト教

四 青年透谷との出会い 五 厭世詩家と女性 六 透谷死後の美那の苦闘

七 文学士北村美那 八 透谷詩の英訳 九 晩年の美那

透谷像をめぐる —平岡・色川・桶谷氏の問題提起を中心に—

一 三氏の透谷像にみられる特色 二 平岡氏の「国民」ないし「民族」概念の恣意性

I



透谷における自由の発見とことば

はじめに

透谷における明治十年代のいわゆる政治家志望の時期といわれるものをわたしは次のように三期に分けたい。第一期は明治十四年の政治的な昂揚に刺激されて生まれたロマンティックなアンビションとしての政治家志望と、その反動としての明治十五年に「怯弱なる畏懼心」をかもし、「氣鬱病」にかかった時期。第二期は明治十六年神奈川県会の臨時書記をふりだしに早稲田の政治科に籍をおきながら同年末静修館に入り、明治十七年には〈時運来〉の昂揚した政治意識の下に政治的使命感にもえて自由民権運動に従事したが、やがて加波山・秩父両事件の敗北に引きつづき明治十八年初頭の武相困民党の潰滅を眼のあまりにみて失望落胆のあまりノイローゼに陥った時期。第三の時期はその後や元気を回復して有一館入りをした大矢正夫とも別れ、政治小説家を志して夏「富士山遊びの記憶」を書き、九月早稲田の専修英学科に再入学したが、その直後大矢から大阪事件の資金作りの行動隊

（強盜）にさそわれ、加盟拒否を伝えたあと三度目のノイローゼに陥った時期。以上三つの時期である。したがって最後の政治小説家志望の時期は、厳密に言えば政治家志望の時期に入れるわけにはいかないが、広い意味では政治にかかわった時期として一括してよいであろう。

次に明治二十年代の文学志向の時期については、わたしはこれを明治二十五年の転機を境にしてこれをはっきり二つの時期に分けたい。すなわち透谷が明治二十年に石坂美那との恋愛とキリスト教への入信を通じて自己回復をとげ、明治二十二年に「楚囚之詩」によって文学者として出発したものの、それは結婚生活への失望もあって、明治二十四年上半期の「蓬萊曲」に象徴されるような、仮構された世界とはいえひたすら「死」を通しての「天上指向」ともいえる下降意識への傾斜がみられる時期と、同年下半期の「我牢獄」執筆や「二宮尊徳翁」にみられる「地上指向」ともいえる過渡期を経た後、明治二十五年以降の爆発的ともいえる昂揚期とそれにつづく突然の死という大きく分けて二つの時期である。

したがって、本稿ではとくにこの文学的多産をもたらすきっかけとなった明治二十五年の〈転機〉を中心に明治絶対主義国家体制の確立期の重圧を「ことば」を武器とすることであけとめねばならなかった透谷が、この危機的状况をいかなる新しい「ことば」との出会いによって切りひらいて行ったか。すなわち自己の既存の「ことば」が他者の「ことば」と出会うことによって如何なる変容をとげ、創造性を発揮していったかを、出来る限り透谷のその時期の表現に即して追究してみたいと思う。

一 「恋愛」

まず明治二十五年の転機を中心に、透谷における「ことば」との出会いによる「自由」の再発見を明らかにする方法として、わたしは透谷の語彙の中からとくに重要だと思われる「恋愛」、「故郷」、「粹」と「俠」、「風流」、「自然」といったいくつかのキーワードををぬき出し、透谷のトータルな精神史との関係々係のもとに、それらの「ことば」が明治二十五年の転機の以前と以後とで、どのような意味や価値の変化をとげているかを追究してみたい。

もちろん、この場合の「ことば」とは、文字に書きあらわされた観念ないし概念としての「書きことば」と、そういう「ことば」と「ことば」との複雑な関係の網の目の中におかれた相対性や多義性、さらにその深層にかくされている何かとしての「ことば」という関係の重層性においてとらえられねばならぬことはいうまでもないが、しかし、われわれはまず前者の透谷によって書かれた「ことば」を手がかりにして後者の「ことば」の領域にせまり、その相互の媒介と連関の中で考える外はない。

さて、ここで本題に入って第一の「恋愛」という「ことば」について検討したいが、これは透谷と美那との実際の恋愛関係を直接的な根拠として生まれた比較的単純な「恋愛」という「ことば」と、歴史的に蓄積された文化遺産としての高度に抽象化された意識や観念としての「恋愛」という「ことば」とでは、いうまでもなく両者に媒介し合う関係があったにせよ、差があるのは当然であろう。

しかも前者の「ことば」に限っても、明治二十年の八月十八日前後の、美那自身の幸福のためにそれを断念しようとしたときの信仰にも似た「恋愛」という「ことば」と、それが一転して成就したと

きの「恋愛」という「ことば」とでは、かなり大きな意味のひらきがあると思う。しかしいずれにしてもこれらの「ことば」は透谷の意識の中で矛盾と緊張関係をもつことによってはじめは生き生きとした輝きをもっていたにちがいない。にもかかわらず、それはやがて結婚生活の日常性の中で色あせたものとなり、ついにはその「恋愛」の当の相手そのものが「俗界の通弁」といわれるものに変化してしまうことによって、その「恋愛」という「ことば」は透谷の意識の暗がりの底の方に解体しながら沈みこんでいったにちがいない。そして、それがときには「蓬萊曲」の青鬼の「恋」に対する嘲笑のことばとして表出せられているといつてよいのである。

ところが、一方明治二十三年の十一月から普連土女学校へ教えに行きはじめて透谷は、やがて教える子の富井まつ子に出会い、その人柄にひそむいたむきな純粹さと師の透谷に対する敬慕の心にいつのまにかプラトニックな恋愛に近いものを感じるようになった。そういう意味では、「蓬萊曲」の露姫のイメージはかつての美那だけではなく、まつ子のイメージが重なっているともいえ、透谷の恋愛観はやがて明治二十五年の「一点星」や「厭世詩家と女性」の新たな「恋愛」の発見に向って、徐々に変化しつつあったともいえるだろう。

明治二十四年の下半期に透谷によって執筆されている「我牢獄」が文体その他において露伴の「風流悟⁽⁴⁾」に触発されて書かれたことは周知のことだが、しかしそこに論じられている「恋愛」と「風流」に関する透谷の思想は、透谷の秘められた体験に裏打ちされて語られているようにわたしには思われる。というのは、そこで透谷は「雷音洞主の風流は恋愛を以て牢獄を造り、己れ是に入りて然る後に是を出でたり、然れども我が不風流は牢獄の中に捕繫せられて然る後に恋愛の為に苦しむ」と書

いているのだが、露伴の「風流悟」の主人公の場合は恋人が病死することによって二人の愛は悲恋に終り、そのことによって逆に「恋の牢獄」という心の樂園に生きることができたのに対して、透谷の場合は、美那との恋愛を結婚という現実のかたちに成就させたことを、露伴の「風流」に対して「不風流」と呼んでいるのであり、そのことで現実の（結婚生活の）「牢獄の中に捕繫」せられたままそこを出ることができず、「然る後に」（まつ子との）「恋愛の為に苦しむ」自己を晦渋な文体の中で告白しているように思われるからである。

そして、重要なことは、「蓬萊曲」にあらわれた現世と自己からの「死」による超脱の願いを、再び地上指向に転換させたものこそ、この成就することの不可能な、それ故にこそ永遠な「恋愛」の観念であったということなのである。そのあらたな「恋愛」の再発見こそ、明治二十五年の一月二日「女学雑誌」第二九八号に掲載された「一点星」という短い詩に結晶したかたちで告白されたものであり、透谷は、その中で「ゆきゝいそがし暴風雨を誘ふ雲の足、／あめつちの境もわかで黒みわたるぞ物凄き。」という罪の暗喩と、「頭の上にうすらぐ雲の絶間より、／あらはるゝ心あり氣の星一つ。」という恋人の姿に擬した美しいイメージを同時に結合させて表現しているように思われる。

そして、その「恋愛」の再発見こそ美那との「恋愛」が自分を救い出してくれた記憶そのものをもあらためてさまざまな色合いで染めかえし、現在のまつ子の純粹さとその過去の美那との「恋愛」の記憶とを一つに重ね合わせて論理化したとき、「厭世詩家と女性」におけるあの複雑な奥行きのある「ことば」の表現がかたちづくられたのではなからうか。

透谷が「恋愛は人世の秘鑰なり。」と力強く云い切ることができたのは、蘇峰の「非恋愛⁽²⁾」に対す

る反論など、他にもきっかけとなる要因があったろうが、基本的にはこのような透谷の内部の、明治二十五年前後の転機がその中心となつてゐるのである。いうまでもなく、ここに与えられた「恋愛」はかつての美那や父快藏宛の「書簡」、あるいは「楚囚之詩」等にみられる單純な美しい精神的な「恋愛」ではなく、純粹な「恋愛」が同時に「罪」をその裏側に内包したものであり、しかもそれはこの現世では絶対に成就することのない永遠の「恋愛」をその深層に含んだものである。

いわば、透谷は「厭世詩家と女性」において「恋愛」の不可能性を、「恋愛」の可能性への希望として逆説的に語つたのである。ここにこの文章のうねるような論理と文体の秘密を解くカギがあり、透谷の「ことば」のもつ異様な迫力が生まれた原因があるのである。

透谷は、美那との恋愛体験にもとづいて「恋愛」はやがて「結婚」に結びつくことで「自由」から「束縛」に変化する矛盾を指摘しているが、そういうことは文章の表層部分にあらわれた論理にすぎず、この文章の深層部分は、同時に「罪業」という「ことば」にむしろ比重がかけられているのである。透谷は「厭世詩家と女性」の文章の主題は、明治二十五年の転機をうながしたこのような複雑なことの重層性にこそあるといつてよい。そしてそれは、明治二十六年一月に發表された「宿魂鏡⁽³⁾」の三角関係の「罪」の世界につながつてゐることはいうまでもない。ここにおいて透谷の「恋愛」観はそれをとらえる「ことば」によつて明らかに重層的な年輪を加え、やがて單純な「想世界」と「実世界」の対立矛盾という図式からぬけ出して、むしろその二つを同時に内包し止揚した「内部生命」の世界に向つて転位してゐたのである。

二 「故郷」および「粹」と「俠」

次に「故郷」ということばであるが、これは日文協第29回大会の文学の部のシンポジウムにおいて「透谷における『故郷』の意味——「我牢獄」から「三日幻境」へ——⁽⁴⁾」において述べたこともあり、ここでは簡単にふれておくにとどめたい。

要約すれば、「楚囚之詩」や「我牢獄」の「故郷」が、かつて自由であったとされている「第一の世」のものであり、昔の記憶の中に生きる「追懷」の「故郷」であるのに対して、明治二十五年の転機をへた後に書かれた「三日幻境」という作品世界においては、「故郷」は「追懷」の「故郷」と「希望」^{ホーヴ}の「故郷」とにはっきり区別され、人生五十年としてこれからの半生をかけるに価する「死に場所」としての「故郷」、未来に向って「永遠に生きる場所」としての故郷を「幻境」としての川口村に見出しているということである。

これがいうまでもなく、「政治志向の時期」の第二期と第三期においてかかわった三多摩をはじめとする現実の民衆に絶望していた透谷が、「文学志向の時期」の第二期、つまり明治二十五年の転機において「心機妙変」し、後に「内部生命論」でいうところの「再造せられたる生命の眼」をもって、新たに「極致」としての「民衆」を秋山国三郎において再発見したことに外ならない⁽⁵⁾。

次に「粹」と「俠」という「ことば」との出会いであるが、これほど鮮やかに透谷の転換を示した「ことば」はないであろう。

透谷の「日記」（『透谷子漫録摘集』）の明治二十五年三月八日の箇所には、彼が「元禄文学攻撃の第

「着手」として『伽羅枕』及び『新葉末集』を女学雑誌社の巖本善治に手渡したことが書いてあるが、つづいて依田学海翁を訪ねて演劇について問答をしたことが記録されている。

それによれば、「俠」も「粹」も、ともに学海によって全面的に否定されて居り、透谷はこれに完全に同意したと書かれているのである。

ところが、その四か月後の七月に「徳川氏時代の平民的理想」において「粹」と「俠」の根本的再評価がなされたことはあまりにも有名で、いまさらここに説明する必要もないであろう。透谷はここで徳川時代の不権衡な制度が平民を抑圧し彼らの「自由」を求める精神や理想を偏固で矮小な「粹」と「俠」の理想に歪曲したことを深い同情と悲しみをもって説いている。

明治二十五年二年の第二回臨時総選挙において当時の内相品川弥二郎による全国的な規模での権力による選挙干渉が行なわれ、死者二十五人、負傷者三百八十人を出すことによって広汎な人民大衆の憤激と抵抗運動が起って、三月十一日に品川は引責辞職に追い込まれた。

その直後の三月十五日に透谷らが日本平和会の機関誌『平和』を創刊したのは、単なる偶然ではなく、右のような状況を背景としている。そういうとき、もちまへの正義感から星野天知が五月に「俠客」（『女学生』）、六月に「俠客論」（『女学雑誌』）を書き、「社会の非常なる不権衡」を生じたとき「非常の平均策を非常の手段」にかりることの正当性を主張したことがかつてはザクロの入墨をしたこともある透谷の血を湧き立たせたということもあるだろう。

しかし精神的な義侠において共通の性格を有していたとはいえず、すでに自由民権運動における壮士批判をくぐりぬけてきた透谷が、単純に星野に同調するはずがない。そこで透谷はその星野の論など

をきっかけに、自らの「粹」と「俠」に関する否定的な見解を歴史的に徳川時代にまでさかのぼって根本的に再検討し、その一人は否定したものを、さらに否定するかたちで、この明治二十五年の七月という段階においてより高次の把握につきぬけたのではなからうか。そして、春の奥州伝導旅行の途中で立ち寄った松島（明25・4・10）で芭蕉の沈黙の意味について熟考し、その何ものにもとらわれぬ「自由」の精神の体现者としての芭蕉を再発見することで、その連想線上に「世に知られず人に重んぜられざるも胸中に万里の風月を蓄へ綽々余生を養ふ」「老俠骨」秋山国三郎を思い描き、その再会をめざしたのであった。そしてこれについては、第Ⅱ部の諸論考を参照していただきたい。

三 「風流」

さて、次に「風流」ということばのとらえ方が明治二十五年を境にしてその前後で大きく変化したことを明らかにしたい。これに関しては題名そのものが「風流」という透谷の文章が『鳳雛』という雑誌に書かれたことがわかっていながら、その実物が発見できず、長期にわたる勝本清一郎の苦心の探索の結果、やっとそれが『青年文学・鳳雛』第一編（鳳雛会刊、明25・12・1）そのものとして、一九六〇年に発見されたことはあまりにも有名である。

これについては発見者の勝本をはじめ多くの透谷研究者がすでに言及しているが、その執筆年月については堀部功夫氏の「透谷『風流』——執筆年月」（『池坊短期大学紀要』第一〇号、昭55・3）が最新の資料を駆使し、最も実証的で説得力に富んでいるように思われる。